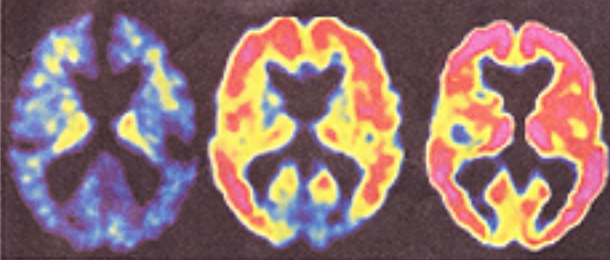


# アルツハイマー予防せよ

アルツハイマー病が発病する前から診断や治療を行い、予防を目指す前例のない臨床研究や臨床試験（治験）が目米で始まる。「症状が出る前なら予防可能」という考えに基づき、うまくいけば、治療の大きな転換点となる。



PETで脳内のβアミロイドの蓄積状況をみた画像。赤やピンクが蓄積を示す。①は「陰性」で症状もない状態。②は「陽性」で、今回の臨床試験の対象となる状態。③は「陽性」かつ症状がみられる状態＝米プリガム・アンド・ウイメンズ病院のスパーリング氏提供

## 発症前に診断・治療

アルツハイマー病は、βアミロイドと呼ばれるたんぱく質が脳に異常に蓄積することが発症に関わっている。だが、蓄積が始まってから、物忘れなどの初期症状が現れるまでには5〜10年かかる。

これまでもβアミロイドを狙う薬は開発されているが、症状のある患者を対象にした試験では期待された効果は出ていない。

だが陽電子放射断層撮影（PET）など画像診断を利用すれば、βアミロイドの蓄積が始まっているかどうかかわかる。それで「陽性」と判定された人を対象に予防的な治療を行う考えが出てきた。

米プリガム・アンド・ウイ

メンズ病院（ボストン）などのチームは、症状のない65〜85歳の1500人を対象に治験を秋にも始める。βアミロイドの蓄積を抑える米製薬大手イーライリリーが開発中の新薬ソラネズマブを注射して3年間ほどかけて予防効果を調べる。

陽性でも発症するとは限らないが、同病院アルツハイマー病研究治療センターのスパーリング所長は「将来、発症を5年でも遅らせることができれば社会的には十分インパクトがある」と語る。ただ、治験で予防効果が確認されたとしても、

一般の人に使うには、米食品医薬品局（FDA）の承認が必要となる。一方、バナー・アルツハ

イマー病研究所（アリゾナ州）のグループは、40代で発症する特異な遺伝子変異を持つ南米コロンビアの住民約300人を対象に、年内にも治験を始める。予防治療の有効性が判定しやすい利点があるという、米ジエネンテック社が開発中の薬が使われる。

日本での臨床研究は、東京大や大阪大、国立長寿医療研究センター、九州大など41施設が参加して6月にも始まる。発症していない高齢者約千人に協力を求め、画像診断などでβアミロイドができていないか、ほかの健康状態はどうかを詳しく調べ、その後の経過を3年間追跡する。異常なたんぱく質のほかにどんな要因があると発病しやすいのかを見極めるためだ。

日本の臨床研究を統括する東京大の岩坪威教授は「症状が出る前の超早期に患者を見分けて薬を使えば、根本治療につながるかも知れない」と話す。

（行方定都）ワシントン、編集委員・田村建二

日米で治験・研究へ